

前橋空襲学習会(先進地視察を含む)のまとめと展望

2022年11月17日手島メモ

1、 学習会と総括

(1) 学習会

第1回(7月29日)

菊地実「米軍史料から見た前橋空襲の実像」

田名網雅久「米軍が撮影した空襲後の前橋の資料について」

第2回(9月29日)

工藤洋三「アメリカが記録した8月5-6日の前橋空襲」

大谷明應「戦略爆撃としての前橋空襲」

第3回(10月27日)

小林啓佑「前橋市における2つの「戦災復興」」

栗田尚弥「8月5日の防空戦」

(2) 総括

菊地発表と大谷発表、田名網発表と小林発表、工藤発表と栗田発表が対になっていた。

①菊地発表は米軍史料、大谷発表は『戦災と復興』を主に前橋空襲を描き、②工藤発表は米軍の攻撃の有様を栗田発表は日本側の迎撃態勢を明らかにし、③田名網発表はアメリカ撮影写真を小林発表は上毛新聞を主に復興を描いた。

6本の発表は最新資料を使った研究成果で、「前橋空襲と復興」の実態を多角的にとらえるのに有益であった。本館展示においてその学恩を蒙ることになる。

(3) 前橋空襲の定義(本館で扱う対象)

①8月5-6日の空襲

6人の報告とも「前橋空襲」は8月5-6日の空襲を対象とするもので、菊地発表の時にその点も確認した。

②問題提起

○視察に行った姫路市の戦災復興記念塔には当時の前橋市からの報告で、8月5日以降3回空爆があったと刻まれていた。

○8月14日の伊勢崎空襲・熊谷空襲で、当時前橋市に隣接した、たとえば勢多郡上川淵村(前橋市)は中原地区9戸全焼(翌日、不発弾で子ども1人死亡)、群馬郡国府村東国分は集落の北半分が全焼した。

※住谷春也氏（ルーマニア文学者）投稿

○時系列と行政単位—アメリカと日本の資料—を踏まえ、前橋空襲をどう整理し定義するか。

○前橋空襲の被害と加害の観点から研究されているが、被災地への救援という観点は、十分に語られたり、論じられたりしていない。被災地は主に旧市（前橋）、救援は周辺町村（新市）

○復興はおもに占領下に行われた。占領という時代は現代史でも忘れられがち。アメリカ・占領をどう扱うか。

(4) 考察

○『日本の空襲 2』（三省堂）「市町村別被害状況」や学習会の成果より。

① アメリカ軍の攻撃目標

○日本の航空機生産工業と東京中心部を廃墟にすること。

② B29とサイパン玉砕

○1944年（昭和19）7月7日、マリアナ諸島サイパン島玉砕、10月B29部隊サイパン島着。

○サイパン島—東京間2,500キロ、B29航続距離（爆弾3トン搭載）6,000キロ。北海道を除く日本全土が爆撃圏内となる。

③ B29 日本本土爆撃9カ月間—3期区分

第1期 1944年11月—45年3月上旬

○工場や軍事施設に対する昼間の精密爆撃

○45（昭和20）年2月10日の中島飛行機太田製作所（爆撃機「呑龍」製作）への攻撃（民家の被害ナシ）。2月16日、2月25日。

○任意爆撃—司令官の命令以外の爆撃、搭乗員や爆撃手の自由裁量で行われる小爆撃。

第2期 1945年3月10日（東京大空襲）—5月中旬

○夜間焼夷弾空襲に戦術転換。沖縄上陸作戦のため九州・四国を集中攻撃。

○45年4月3日立川飛行場夜間空襲、4月24日日立航空機立川工場爆撃、4月30日立川陸上航空廠爆撃、5月19日立川飛行機爆撃（工場破壊のために高性能弾で民家は焼かれず）

○4月4日—中島飛行機太田・小泉。

○4月7日—矢場川村（?）

第3期 1945年5月23・25日（夜間東京大空襲）—8月15日

○大都市・地方都市攻撃

○関東地方一茨城・栃木・群馬・千葉・埼玉・東京都下の中小都市

7月6日千葉空襲（死傷者1,679）、7月12日宇都宮空襲（死傷者1,679）、7月19日日立空襲と艦砲射撃（死傷者2,199）、7月19日銚子空襲（死傷者1,181）、8月1日水戸空襲（死傷者1,535）、8月1日八王子空襲（2,900）、8月5日前橋空襲（死傷者1,286）、同日高崎空襲（死傷者37）、8月14日熊谷空襲（死傷者678）、同日伊勢崎・高崎も

○7月10日・18日・28日・30・8月5日・8月11日・8月14日

8月5日前橋空襲・高崎空襲？、8月14日伊勢崎空襲・高崎空襲？

表1 一時系列に前橋市域を中心にまとめたもの

図1 群馬県地図

(5) 小結論1

(6) 前橋復興と占領

○前橋空襲から敗戦までの復興と敗戦後の復興

○戦災復興計画立案前（自力建設、一つ目の復興）と立案後（二つ目の復興）

○復興の終点（企画展示の終点）

『戦災と復興』刊行年一昭和39年（1964）3月31日

(7) 小結論2

2、 公的資料館としての機能と役割（『提言書』7頁）

(1) 二つの機能

○「戦争体験の記録」（資料の収集・保存）

○「戦争体験の継承」（展示）

※議論の順位として「展示（戦争体験の継承）」から議論を進めながら、「資料の収集・保存」も。

※展示は最新の研究成果、最新の技術を使い、五感に訴える（臭覚は難しい）工夫が求められる。一例として、白黒写真のAI技術によるカラー化（群馬県遺族の会・県国保援護課）。

(2) 役割

○「地域の記憶の場」

①過去を共有し未来を築くための力を養い、②平和形成力（ピースリテラシー）を育むー
平和教育の拠点（亡くなった人たちに思いを馳せ、平和を続けるため、常に考える場）

3、展示構成(「戦争体験の継承」)

(1) 四つのコーナー

- ①「資料で語る戦争とくらし」
- ②「前橋空襲」
- ③「前橋復興」
- ④「図書室」

(2) 各コーナーの概要

「資料で語る(見る)戦争とくらし」

- 非戦争体験者の時代になるので、資料を通して戦争やくらしを考える。
- 資料は由来がしっかりしたものを展示（収集・保存も）。

◎あたご歴史資料館、マチダ平和資料館からの寄贈資料

◎市民からの寄贈資料（新収蔵）

「前橋空襲」

- 軍事レベルーアメリカ側と日本側の対応
- 空襲に対する市はじめ行政の動き
- 空襲に対する市民の動向
- 救援体制

◎市所蔵などの行政文書類

◎『戦災と復興』の原資料

◎生活課や公民館など証言集、DVD 類

◎市民からの提供資料

「前橋復興」

- 自主・民間レベルの復興
- 市および県・国レベルの復興
- 戦災復興
- 占領と戦後民主化

◎市所蔵などの行政文書類

- ◎『戦災と復興』の原資料
- ◎生活課や公民館など証言集、DVD 類
- ◎市民からの提供資料

「図書室」

○学習ができ、小休憩コーナーを兼ねる

◎マチダ平和資料館寄贈の書籍群

「フロログかエビログ」

○2016年から始めた8月5日の「前橋空襲一斉慰霊」

4、開館準備活動の手順

- 本館のメイン展示となる「前橋空襲」「前橋復興」から始める。
- 「前橋空襲」「前橋復興」の展示内容、スペースが決め、「資料で語る（見る）戦争とくらし」、次に「図書室」を決まる。
- 4コーナーの仮決定ができれば、全体調整を行う。

5、「戦争体験の記録」(資料の収集・保存)と開館準備活動

(1)手島仁の活動から

①旧上川淵村役場文書

○上川淵村当直日誌（昭和20年）

※行政文書の展示や活用が可能

②元総社地区歴を語る会提供資料

○元総社村・小野沢豊作の空襲対応緊急会議メモ

※同歴史を語る会より、本館開設に協力したいという申し出。体験者が自分で文章化するのは大変であるから、聞き取りの態勢をつくってほしい。

③住谷春也氏投稿

○東京新聞（2022年8月18日）に「東国分への空襲」を投稿

※旧制前橋中学校の同級生・高橋義雄氏（漬物・タムラや会長）は、住谷さんの新聞投稿を読んで、電話をかけてきて「前橋空襲」について1時間語った。聞き取りをしては。

④『板垣源四郎日記』

○上毛新聞伊勢崎支局長から、伊勢崎市長・板垣源四郎の「日誌」（備忘録）を古書店で購入した市民が、価値があるかとの問い合わせを受けた、価値のある記述があるか確認してほしいとの依頼があった。

※前橋空襲後に板垣市長が前橋市の堀市長を見舞うとともに空襲被害を視察、消火活動は

無駄であることを堀市長と共に確認、その10日後の伊勢崎空襲では、消火活動をせず、逃げるよう指示し、被害の割合に比べ死者数が少なかったことを記録。新資料の発見。

⑤市民からの手紙—天皇に直訴した奥野とめ子さん

○北爪重夫さんからの手紙で、前橋空襲の惨状を目にし、天皇に戦争終結を直訴した女性がいたことが明らかに。

⑤ 岡庭ひで（大正9年生まれ、書家・岡庭呑石先生の母）の詩「GHQ」

夫・善之助編纂『みまかり』収載（平成9年）

(2) 既存・既刊した資料の確認との読み直し

○『戦災と復興』（昭和39年）は貴重な資料、最大限の活用。

○市生活課所蔵の出版物やDVD

○市立図書館所蔵の出版物やDVD

○6 研究者の研究物やレジュメ

専門家（委員）が選択→市職員・市民学芸員が図表化（ブロック）

(3) 県や市の行政文書調査、国立国会図書館など

○市の関係課

○県立文書館

○国の関係機関

専門家（委員）と市職員→図表化（ブロック）

(4) 前橋空襲体験者への聞き取り調査

○元総社地区歴史を語る会や住谷春也さんの指摘、新聞投稿から、前橋空襲を体験した方がまだお元気である。しかし、文章を書くことが大変。そこで、市民学芸員が聞き取り、活字化する。新資料の発掘にもなるし、ブックレットのシリーズにできる。

6、その他

○爆撃中心点の設置

○戦災復興記念塔の再建

まとめ(展望)